砂沢式再考

根岸　洋

要旨　東北最古の水田遺構が検出された砂沢遺跡は、芹沢長介によって設定された砂沢式の標識遺跡である。砂沢式は、未だ研究者間での一致は見ていないものの、おおよそ大洞Ａ'式直後という位置づけを与えられていると言える。しかしながらむしろ問題は、砂沢式以後に土器型式の系統がいかに展開し、田舎館村垂柳遺跡が帰属する田舎館式に至るかという過程にこそある。かつて須藤隆は青森県内において砂沢式以後を二系統に整理し、田舎館式まで存続するとした。現在でもこの編年観は大きく変更されず用いられているようである。ただしこの二系統は、一面では「遠賀川系土器の影響」という伝播論に支えられていた面も否定できない。

本稿では変形工字文の構成に着目し、まず砂沢式内部に系統差にまで至る様相が存在するのかどうか検証した。その結果、砂沢式を新古の二段階に分離し、新段階において二系統の別が存立している事を確認した。次に五所式・二枚橋式の内容を検討し、砂沢式新段階と直接に繋がる様相を提示した。特に二枚橋式は段階区分の可能性を示した。以上の作業により、砂沢式内部で生まれた文様系統が互いに影響を受けながら変遷した様相を素描した。こうした視点は「変形工字文」として従来一括されてきた文様を解釈する上でも有効である。

１．はじめに

東北地方に弥生時代が存在した可能性を最初に指摘し、縄文時代の最終末に位置する土器型式としての大洞Ａ'式・更にそれに後続する型式を設定したのは、言うまでもなく山内清男である（山内　1925・1930）。今日では、類遠賀川系土器[1]・水田遺構および農具などが数多く報告され、北部九州から本州北端の青森県まで殆ど時期差無く弥生時代が開始されたという共通認識がなされているようである。

こうした認識を支えている一つの根拠として、東北地方北部の砂沢・垂柳の両遺跡が挙げられる。この両者ではそれぞれ水田遺構・炭化米が検出されているが、時期差がある事で稲作農耕文化のある程度順調な発展が考えられている。青森県弘前市砂沢遺跡は大洞Ａ'式直後の砂沢式に、同田舎館村垂柳遺跡は田舎館式に比定されている。砂沢式と田舎館式の間には時期差があるが、須藤隆が示した編年観によって両者の間には系統性がある事が示され（須藤　1983・1998）、青森県内の編年をまとめた岡田康博によってもおおよそ同調がなされた（岡田編　1988）。すなわち、津軽平野を中心とする青森県西半では砂沢式・五所式・井沢式・田舎館式３群、下北半島から馬淵川流域までの青森県東半では砂沢式・二枚橋式・宇鉄Ⅱ式・田舎館式２群の順序で型式変遷するとされた。須藤は前者をＡ系統・後者をＢ系統と呼び分けているが、両者の違いを次のように著述している。Ａ系統は「遠賀川系土器の影響が明確」であり、その器種構成は「東北中・南部以南の弥生文化との関係で理解できるもの」であるとする。またＢ系統は器形・装飾・施文手法・文様構成が極めて

漸進的であり、かつ北海道の「恵山文化と共通した文化要素をもち、型式変遷もよく対応」すると言う（須藤　1998、pp513～514)。須藤の言う「遠賀川系土器の影響」とは、おおよそ甕・壺・蓋のセットの出現であると考えて良い（須藤　1987)。特に甕・壺はその器形にとどまらずハケメなどの調整技法にも影響が見られるとする。このような類遠賀川系土器を編年しようとする論文が最近相次いでいる（佐藤嘉　1992・木村　1998・高瀬　2000ａ・斉藤　2001）が、いずれも時期区分の前提は先に挙げた須藤の編年観である。その須藤の編年観は、類遠賀川系土器の到来が契機となってＡ・Ｂ系統の別が生成したとも解釈できることに注意しておきたい[2]。共通性が強く地域差がさほどない大洞Ａ’式から、いかなる過程を経て須藤の言う２系統の別が生成するのかは明確に語られていないと言える。こうした在地の土器型式間に存在する系統を見出すためには、まず砂沢式の内容を検討することから始めなければならない。砂沢式の器種構成については既に須藤が細別しているが（須藤　1998、pp491～498)、砂沢式からどのように五所式・二枚橋式へと連絡するのかについては、変形工字文の変化・一部の器種の継続を除いては触れられていない。本稿では、あくまで東北地方北部のみにおいて辿ることの出来るタイプの変形工字文の変遷を追い、その連絡の様相を素描することにする。

こうした基礎的作業を積み重ねる事で、はじめて類遠賀川系土器などが関連する複雑な系統変化に肉薄できるものと考える。忘れてはならないのが、こうした土器のみの縦の系統を見出し編年を構築したところで、それが縄文・弥生両文化を分けるメルクマールにはならないということである。本稿では砂沢式と大洞Ａ’式を別型式とするが、土器のみを論じる限り大きな変化はむしろ以後（二枚橋式・五所式）にあるようである。いずれにせよ、生業の転換が重要な意味を持ってくるであろう時代（文化）区分を論じる前に、土器の変化のみから縦の系統を見出す基礎的作業を謙虚に行う事に本稿の微意がある。こうした姿勢は学史を重視することと、決して矛盾しないと考える。

２．砂沢式について

２．１　研究史

砂沢式は、砂沢遺跡出土土器を基に芹沢長介によって設定された型式である（芹沢　1960)。氏は砂沢式を「(亀が岡式）第Ⅴ期（大洞Ａ’期・砂沢期)」に位置づけた上で、高杯の内面中央に施される円形文・工字文のくずれた波状文など砂沢式土器の特徴を言い当てている。これはあくまで大洞Ａ’式の一地方型式としてとらえた観点であって、現在にまで至る大洞Ａ’式との区別の問題を引き起こす端緒となった。大洞Ａ’式のメルクマールとして山内清男（山内　1930・同編　1964）は変形工字文の完成を挙げているが、標識資料や模式図に見られる変形工字文と砂沢式とが大差なかったため芹沢の見解が生まれたと考えられる。

砂沢式を大洞Ａ’式の新段階とするのは、工藤竹久氏の論文が代表的である（工藤　1987)。これは青森県名川町剣吉荒町遺跡、八戸市是川中居・堀田遺跡の資料を基礎としたものである。氏は、砂沢式は「大洞Ａ’細分型式の新段階並行」であるとする須藤（須藤　1970・1984）に従い、標識資料の曖昧であった大洞Ａ’式に剣吉荒町遺跡出土土器群をあて、砂沢式への変形工字文の系統的変化を追った。剣吉荒町Ⅱ群が大洞Ａ’式の古相に位置づけられ、砂沢式は新相にあてられている。

更に須藤は最近、砂沢式を大洞Ａ’式の新段階として捉える編年観を明示している（須藤　1997）。林謙作も同様の見解を示す（例えば岡田編　1988における発言）。

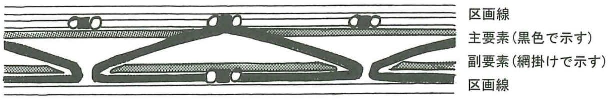
一方で、大洞Ａ’式と砂沢式は別型式であるとする編年観の直接の契機は、弘前大学考古学研究室の調査成果によって大洞Ａ’式の内容の一端が明らかになったことである（弘前大学教育学部考古学研究室　1981）。（牧野Ⅱ遺跡）Ⅲａ・Ⅲｂ類として区別された両者の相違は、主として変形工字文の沈線が太くて深いという点と貼付される粘土粒の明確さの２点である。文様帯の段数や刺突文の技法など幾つかの相違点を指摘してもいる。同様の見解は中村（中村　1988）・松本（松本　1998）らにより提示され、前述した工藤・須藤らの編年観とは食い違いを見せている。特に松本は、大洞Ａ’式と砂沢式の間に単に文様の変化だけにとどまらず、器形や文様帯幅など全体的な属性の変化を指摘し、「異なる型式であると認識」するに至っている。また高瀬克範（高瀬　2000ｂ,pp64）は、「山内の単位をできるだけ拡大解釈しない方針でわれわれ自身が編年網にあらたな意味づけをおこなうしかない」としながら、広域編年の俎上に大洞Ａ’式より後に砂沢式を置いてみせた。

また砂沢式自体の段階区分に関しては、磯崎正彦の発言を記録した中村五郎の論文がある（中村　1988、pp129・130）。最近、砂沢遺跡の調査成果を生かして砂沢式を二段階区分する論文が出た（矢島　2000）。更に品川欣也は、砂沢遺跡の完形土器の集中地点を取り上げ三段階区分している（品川　2002）。

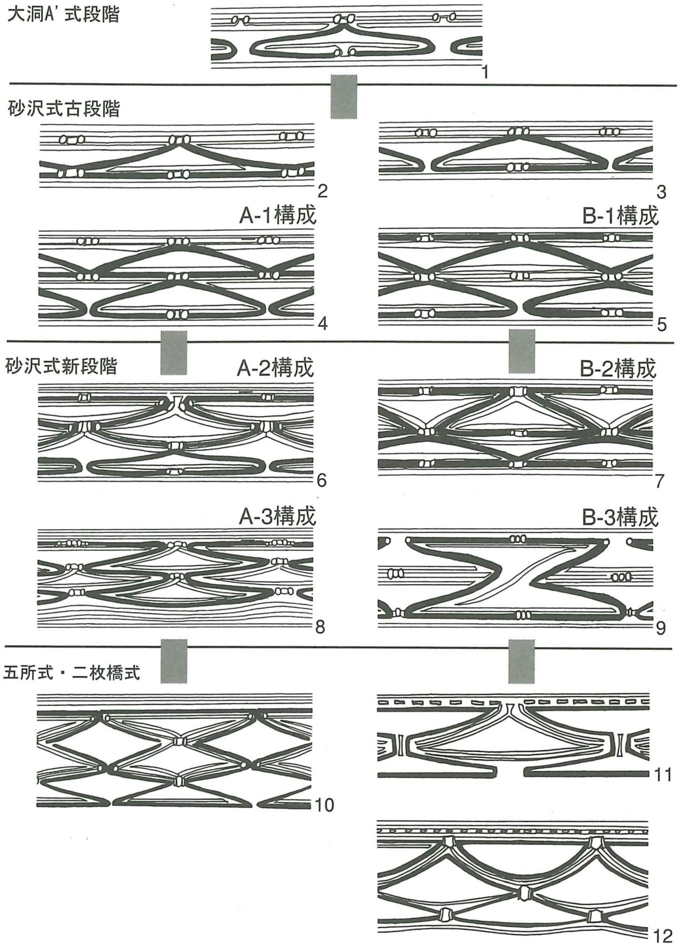
２．２　変形工字文の系統

筆者は松本・高瀬らの編年観を支持して大洞Ａ’式と区分するが、変形工字文の文様帯幅・沈線の太さなど微細な差異にのみ立脚して両者を区分するのではない点に従来の研究との違いがある。高瀬（高瀬　2000ｂ）は、鈴木正博（鈴木　1987）の主張する大洞Ａ２式の内容を認め、大洞Ａ’式は多元的な発生が考えられる事を論じた。こうした観点を突き詰めると、大洞Ａ’式の中にも地域差を見出す議論へと発展するであろう。こうした議論の展開を踏まえ、筆者は変形工字文の構成の複段化（二段が大部分である）が一般化する段階をもって砂沢式と認めることにする。一段構成と二段構成の間に時期差を見出すような出土状況は現在のところ見受けられない上に、地域差としての構成差は二段以上にならなければ抽出できない。こうした変形工字文の構成差を重視する観点によって、はじめて次段階の五所式・二枚橋式への接続の説明手段を得ることができるのである。

変形工字文の変化の模式図（第１図）に従って、まず最初に変形工字文そのものについて用語の統一をしておく。変形工字文のタイプ分けが最初になされたのは福島県一人子遺跡の報告においてである（馬目・古川　1970）。大洞Ａ’式には東北型と関東・中部型があるとしながら、共通する構成要素に言及した。ただしこの時点では砂沢式は大洞Ａ’式の新段階の扱いであって両者に区別はなかった事に注意しておこう。更に須藤（須藤　1976）は、各構成の施文順序を復元推定し東北地方における変形工字文Ａ～Ｄ型を設定した。一方石川日出志は、文様構成全体を規制する「主文線の構図を基準」として変形工字文Ａ～Ｄ群としてタイプ分けした（石川　1985）。石川は須藤分類を概観して、関東地方を考える際「東北地方中・北部の変形工字文との関連性や時間的な推移」が不明瞭であると批判している。石川の示した「施文作業単位」は、Ⅰ「区画線の施文」Ⅱ「主文



第１図　変形工字文の構成要素



第２図　砂沢式周辺の変形工字文の展開模式図

線の施文」Ⅲ「副文線の施文」Ⅳ「交点の施文」である。およそ工字文・変形工字文において凹線の「三方向に突出部を持つ三ツ叉文」が「主体文様」となる（飯島　1993）と換言できる。「主体文様」の変遷を捉え、付随する副次的な文様要素はそれに変遷を規定されるという前提で考えるのである。よって本稿では変形工字文の構成要素を、区画線・交点・主要素（Ｐ）・副要素（Ｓ）と呼び分けることにする（第１図）。Ｓ（副要素）には、三角文が反転する部分の天井に沿うもの・三角文内部に沿うものの二種がある。また第２図ではＰを黒く塗りつぶしてモチーフを示してある。

大洞Ａ'式段階は「平行線的な工字文が崩れて三角連繋化した変形工字文」（磯崎　1964）が描かれる。この三角連繋部分が主要素（Ｐ）であり、やや扁平な三角形である（第２図１）。「左右の

端部が若干引き上げられる」（馬目・古川　1970）特徴を持つ。副要素（Ｓ）中央には凸部が見られ、大洞Ａ’式の特徴を表す。沈線幅は1.5～2.5㎜であり、断面形は三角に近く施文工具は角張った物が推定される。一段構成が多いが二段以上になるものも稀にある。文様帯幅は狭い。また交点に貼り付けられる粘土粒は、比較的小さい。

砂沢式に至ると沈線幅は１～２㎜ほど広くなり、断面形は丸みを帯びる（弘前大学考古学研究室1981）。Ｐによって描かれるモチーフは著しく定型化した三角文である。砂沢式は新古の二段階に区分する。古段階には一段構成（同２・３）、二段構成（同４・５）がある。３のＰ同士を接続させ交点を設けると、「連結型」（工藤　1987）の２ができる。２を上段に、３を下段に接続させると二段構成となる。そのまま三角文を接続させたのが４であり、これをＡ－１構成と呼ぼう。一方で接続を半単位ずらしたのがＢ—１構成である（５）。このように砂沢式古段階には、文様構成の別からＡ・Ｂ構成が成立している。いずれもＰによって表出される三角文が全体の文様構成を作り出している。Ａ—１構成は頂点を上にした三角文を二つ重ねており、Ｂ－１構成は頂点を向かい合わせにした三角文を二つ重ねていると見る事ができる。

この２構成の別は、新段階に入っても維持される。矢島は「頸部横線文の付加と文様構成の重層・多重化」する段階を新相とした（矢島　2000）。しかしながら、Ａ—２構成（第２図６）・Ｂ－２構成（同７）の一段目に着目すれば、沈線の「重層・多重化」と言うよりもＰで描かれるモチーフの構造的変化として捉えるべきである。砂沢式古段階における区画線が三角文を表出していたＰと連絡する事により、連続横位反転するＰを生成しているのである。このために交点部分の貼付粘土粒の数が４個に増加する事が起きるのである。Ｓは主要素の三角文内部で三辺全てに沿うようになり、それだけで三角形を作り出す。そうしてこの部分が「重層・多重化」していると見える事になる。更に、一段目と二段目のＰが接続し、二段目のＳも三条に増えるＡ—３構成（同８）が成立する。ただし６・８の間に段階差を見出す根拠は今のところないため、共時的関係にあると見ておく。一方で、次段階に二枚橋式が来る下北半島ではＢ—３構成が成立する（同９）。Ｐが描くのはＸ字形に類似するモチーフである。内部には入組波状文（福田　1997・2000）由来と思われるＳ字形の沈線文が施され、残りは刺突文が充填される。７と９は戸沢川代遺跡（葛西　1991）にて共伴しているため、並行するものと見て良いだろう。

Ｂ—２構成は、大洞Ａ’式のまとまりとされる剣吉荒町遺跡にその原型を見出す事が出来る。台付鉢・壺形土器に施されるこの種の変形工字文は、一段目のみ「重沈線化」する点でＢ—２構成に繋がる様相が見られる。交点部に凸部が残る・Ｐ（主要素）が一筆描きできない点で異なるが、大洞Ａ’式の範疇は既に逸脱していると言える。当遺跡は三本木原地域にあり、Ｂ—２構成はその影響下で成立した可能性が高い。よってＢ—１構成からＢ—２・３構成への変化は、砂沢式内部での系統的変化と言える。これが下北半島で二枚橋式の変形工字文の成立母胎となるのである。

2．3 各遺跡の様相

砂沢式土器は、青森県域を中心に岩手県北部・秋田・山形県と日本海側に分布する。本稿では青森県域を中心に見ていくため省略するが、秋田県では諏訪台Ｃ遺跡（利部 1990）・地蔵田Ｂ遺跡（石郷岡・西谷 1986）、山形県では生石２遺跡（安部ほか 1986）などでまとまった資料が出土している。ただしいずれもＡ―１構成の変形工字文が大勢を占める砂沢式古段階に相当する。

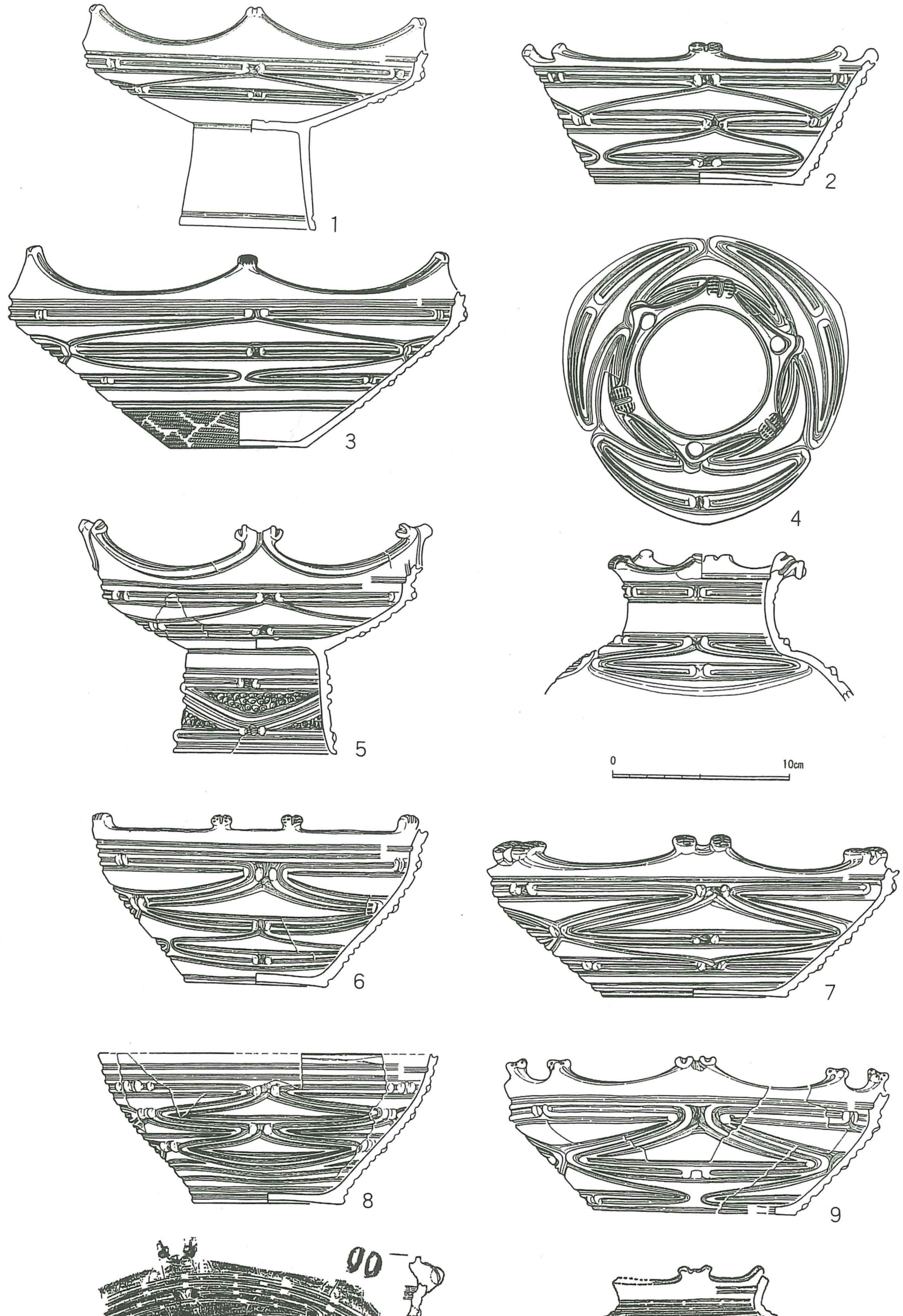
〈青森県西半〉

まず弘前市砂沢遺跡（藤田・矢島ほか 1988・1991）の検討から始めよう。砂沢遺跡の文化層の堆積は、台地上・台地斜面・台地下平坦部という調査区域の地形ごとに異なる事が指摘されている。この中で砂沢式土器が集中したのは台地斜面部であり、報告書にグリッドごとに完形土器の出土地点がドットで示されている。報告書でも指摘されているが、砂沢式の総体を捉えにくくしている一つの要因として、少数ながら五所式・二枚橋式が出土しているに拘わらず砂沢式と層位で明確に区分できなかった事が挙げられる。大洞Ａ’式土器にしても、Ⅴ層と報告された台地斜面部～台地下平坦部にのみ分布する「腐食質の黒色土」層の表面でまとまった出土がある以外は、少なくとも層位では砂沢式と明確に分離はできなかったのである。溜池造成地という立地の特殊性や、竪穴住居跡などの遺構が検出されなかった点も加味しなくてはいけないが、こうした遺物出土状況からは当然異型式の同時使用という状況も想定できよう。しかし系統論を実践する以上、型式学的に分離できる単位を定点に据えてこの標識遺跡を位置付ける必要がある[3]。なお第３図に挙げる土器は全て台地斜面部出土の資料である。砂沢式古段階には典型的な山形口縁を持つ高杯（第３図１）、浅鉢（同２・３）、壺（同４）などがある。高杯の杯部における変形工字文の施文域は、台部との間にわずかながら隙間を設けている点に特徴がある。台部には下部に２条沈線が入るのみである。浅鉢も同様に施文域が前面には広がってはいない。変形工字文が二段になるのは主に浅鉢であって、Ａ―１構成（同２）・Ｂ－１構成（同３）の二者がある。４は一段に拘わらず、Ｓ（副要素）が増加している例である。ただし新段階であれば施文域が広がる筈であるから、古段階に含めてもよいと思われる。砂沢式新段階に入ると、一様に施文域が体部全面に広がる。高杯（同５）では台部下半にも変形工字文が施文される。三角文内部に刺突を充填する技法を用いている。これをＳ（副要素）と見れば、杯部が古段階のままでも新段階に帰属させる事が可能であろう。浅鉢にはＡ―２構成（同６）・Ａ―３構成（同８）・Ｂ－２構成（同７・９）がある。Ｂ－２構成を施文する浅鉢が古段階の器形を維持するのに対し、Ａ―２・３構成を施文する浅鉢は縦に施文域が伸びるので器形も変化を遂げている。

新段階のまとまりとして、弘前市宇田野（２）遺跡（白鳥ほか 1997）の「捨て場」出土資料がある。浅鉢ではＢ－２構成（同10・11）がある。12はＡ―３構成の変形工字文であるが、ここでも刺突充填手法が用いられている。

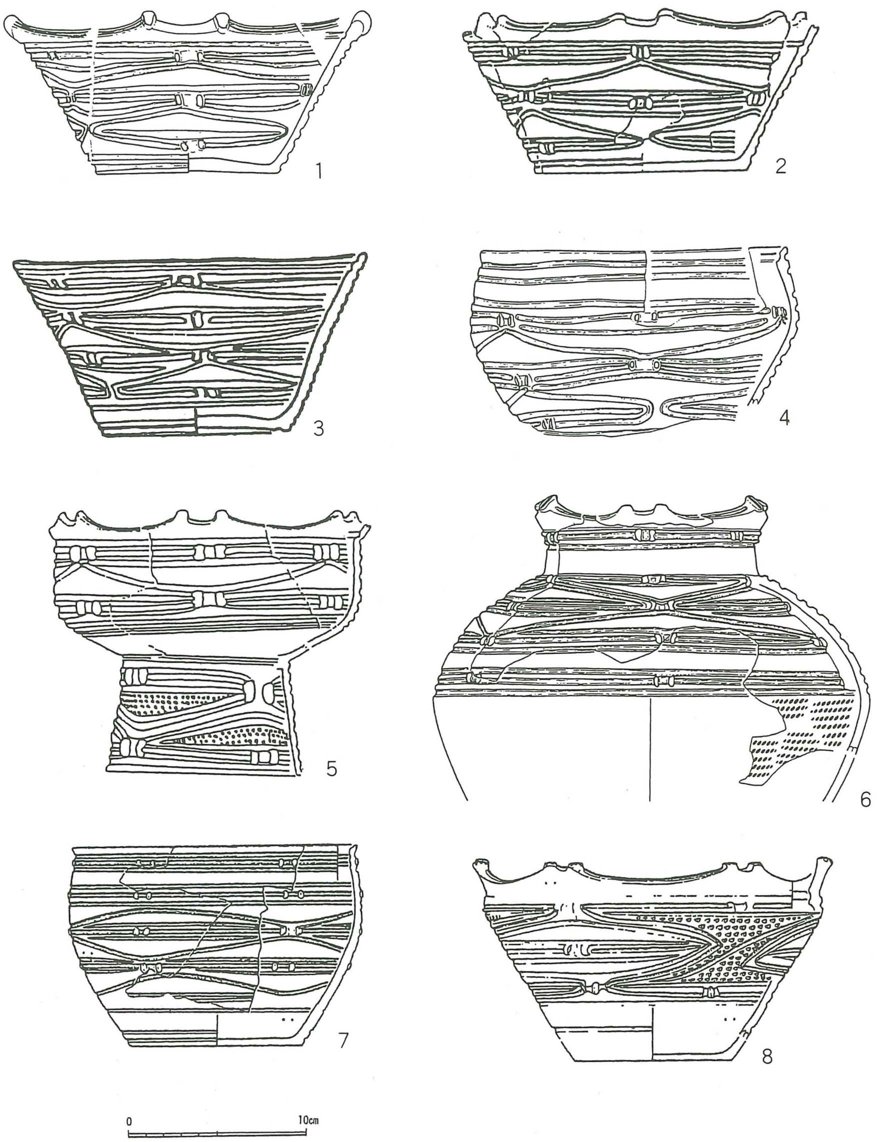
〈青森県東半〉

工藤竹久（工藤 1987）によって注意された資料に下北半島の新出の資料を加えて検討する。砂沢式古段階では、Ａ―１構成（第４図１・４）・Ｂ－１構成（同２・３）の両者がある[4]。瀬野遺



第３図　青森県西半の砂沢式土器

跡出土浅鉢（伊東・須藤　1982）は、Ｂ－１構成に更に一段三角文を接続させた例である。正面の一段目・二段目の三角文が接続する交点部分に注目すると、貼付粘土粒が省略されて彫り込みのみになっている点に気付く[5]。一段・二段目のＰは交点と接触せず遊離している。既にＢ－３構成への素地が築かれている点と見て良いだろう。



第４図　青森県東半の砂沢式土器

（1・4・6是川中居遺跡　2畑遺跡　3瀬野遺跡　5大川目遺跡　7・8戸沢川代遺跡）

新段階に入ると、青森県西半と同じく施文域が広がるものが見られるが、下北半島で独自の動きが見られる。大川目遺跡（工藤　1987）出土の高杯（同５）は、第３図６と同じ特徴を持つが器形・口縁装飾などの点で異なる。台部に刺突充填手法を用いるのがやはり画期と考えられそうである。是川中居遺跡（工藤・高島　1986）出土の壺（同６）にはＢ－２構成の変形工字文が施される。一方で下北半島の戸沢川代遺跡（葛西　1991）では、Ｂ－３構成が成立している（同８）。内部に刺突を充填するＸ字部分が互いに独立して単位文化している。ただし扁平な三角文部には貼付粘土粒・彫り込みなどの要素はしっかりとした形で残存している。Ｓ（副要素）も部分的ながら増加している。この単位文化こそが次段階の二枚橋式を生む母胎となる。

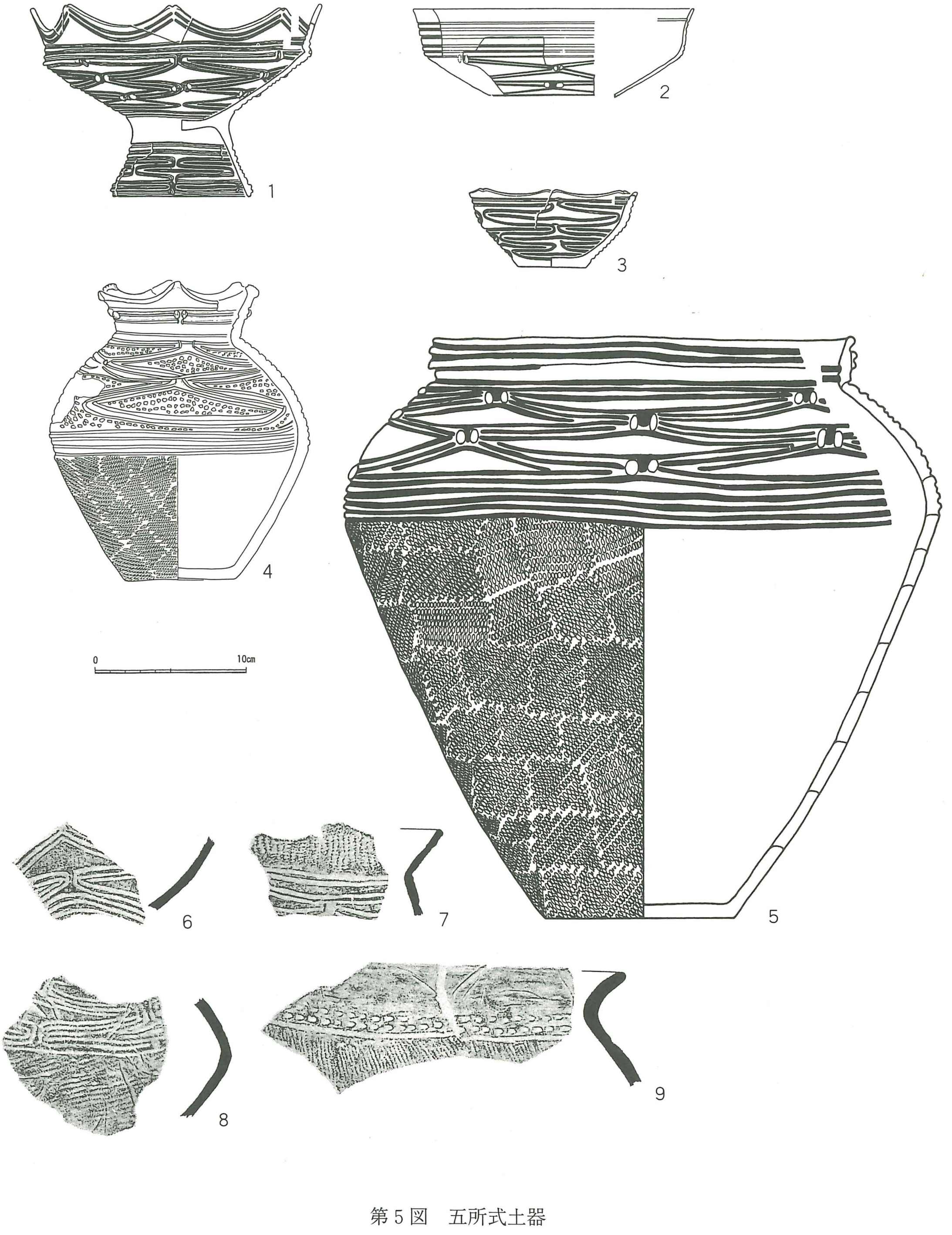
砂沢遺跡を中心とする青森県西半には変形工字文Ａ―２・３構成、Ｂ－２構成が見られ、青森県東半にはＢ－２・３構成のみが見られる。この地域差こそが次段階の五所式・二枚橋式の変形工字文の違いを生んでいるものと考えられる。ただしＰ（主要素）のモチーフの変化・それに伴うＳ（副要素）の増加・刺突充填手法の採用など変化の画期を同じくしている点には着目してよい。砂沢式古段階（Ａ―１・Ｂ－１構成）においては量的傾斜に過ぎなかったものが、新段階に至って系統差となって現れたと考えられる。

３．五所式・二枚橋式について

３．１　五所式

村越潔によって設定され（村越　1965）、標識遺跡は青森県中津軽郡の五所遺跡である。氏は変形工字文の「中心に粘土粒の存在がなく」「沈線の巾がきわめて細い」という２つの理由から、砂沢式と田舎館式の間に編年的位置を置いた。砂沢式との近似と異同を強調する一方、田舎館式との間にはなお＋αが存在すると主張した。須藤隆はこの編年観を受け継ぎ二枚橋式と並行する事を説き（須藤　1976）、型式内容についても言及した（須藤　1983）。須藤は口縁が外反し肩部で強く張る器形の甕（第５図９）に着目し、二枚橋式になく「遠賀川系の甕の形態を踏襲したもの」であるとした。またその変形工字文について、二枚橋式に施される「変形工字文Ｂ型」（須藤　1976）に近いが、「交点の彫り込みが省略され」「流水文的な文様構成」であるとした。更に最近、矢島敬之が新出資料を用いて五所式の内容を再考している（矢島　2000）。氏は砂沢遺跡の報告者でありかつＡ10区出土の未報告資料の報告者である（矢島　1992）。砂沢遺跡・津山遺跡（笹森・茅野　1997）などの資料を用い、砂沢式から継続する器種や五所式の変形工字文についての精緻な観察と分析を行っている（矢島　2000）。本稿では矢島の論文を定点に用い、主に変形工字文の分析から砂沢式新段階から五所式への素描を試みたい。

砂沢遺跡Ａ10区（矢島　1992）からは「変形工字文Ｂ型」（須藤前掲）に類似する変形工字文[6]が少なからず出土している。矢島はそれらの交点部の処理法に着目し、ａ～ｄ種に分類している。氏の述べる通り、ｂ種：交点部彫り込みと低い粘土粒の盛り上げ・ｄ種：彫り込みと粘土粒の消失の割合が高い。これらの諸特徴からは後述する二枚橋式の変形工字文と共通する変化の様相が窺われるが、筆者がまず注意したいのはこれらの変形工字文が砂沢式のどの構成から生成するかである。



第５図　五所式土器

（１・３砂沢遺跡　２・５吾妻野Ⅱ遺跡　４大曲Ⅲ遺跡　６～９五所遺跡）

変形工字文の変化はＰ（主要素）によって制御されると考えられている以上、そうした視点からの分析を先にすべきであると考える。よって文様構成全体が分かる資料を用い、二枚橋式と区別のつかない資料は除外して五所式の内容を捉え直すことにする。

砂沢遺跡（藤田・矢島　1991）出土高杯（第５図１）に施される変形工字文は、第２図10に模式化してある。三段に重ねられた変形工字文は、途切れがあるもののＰ（主要素）が独立したモチーフを描き出している。この単位文化は砂沢式Ｂ－３構成で見られた現象であるが、本質的にこの文様はＡ—２構成がなければ生まれ得ない。二・三段目に着目すると、両者の接続具合は砂沢式Ａ—２構成と言えるからである。これは、一段目と二段目の接続がＢ－２構成に類似するがＳ（副要素）が両者の内部に存在する点からも傍証される。ただし、文様全体としてはＰが流水文的なモチーフを描くのに対し、間の菱形文部分にはもはやＳは入れられずネガ・ポジの関係性[7]が出来上がっているともとれる。同じＰによって描かれるモチーフであっても、内部にＳを入れて装飾する部分とそうでない部分とに分かれているのである。この高杯は矢島が述べるように器形・装飾とも砂沢式の高杯（第３図６）に類似しており、五所式の最古段階における資料であると思われる。標識資料（村越　1965）のうち高杯である第５図６はこれと類似する資料であろう。一方、変形工字文Ａ—３構成経由の変形工字文も存在する。大曲Ⅲ号遺跡（田村　1968）出土壺[8]（第５図４）・吾妻野Ⅱ遺跡（三宅　1975）出土甕（同５）がその典型である。前者はトレンチ出土資料であるが、器形や施文域など砂沢式新段階の様相を残している。しかし変形工字文の交点の処理は、一段目頂部が矢島ｂ類・二段目頂部はｄ類であって五所式の条件を満たしている。また一段目と二段目は明瞭に交点部を設ける形では接続してはおらず、一段目を切る形で二段目の三角文（扁平化している）が施されている。その後でＳ（副要素）としての三角文が内部に入り刺突充填手法が用いられるのである。すなわち、もはやＰ（主要素）同士の接続という意識は薄れてただ文様構成を維持しようという方向が読みとれる。施される沈線はいずれも2.5～３㎜とやや細線化している。後者は採集遺物であるが、その文様構成は４と同様である。ただしこの甕形土器は、方形に近いしっかりとした貼付粘土粒と深い彫り込みを持つから４よりは古い様相かもしれない。この２つと比べると、標識資料の第５図８は、この構成を維持しつつも更に流水文化し、交点部処理は盛り上げのみであるからより後出とする事ができるのである。

３．２　二枚橋式

東北大学文学部考古学研究室によって調査された、青森県大畑町二枚橋遺跡の調査によって出土した土器群が標識資料である（須藤　1970）。この論文で、「縄文晩期直後の砂沢式以後で、稲作農耕が営まれた田舎館式期に先行する」二枚橋式が設定された。「波状工字文」などの諸特徴から砂沢式との間に強い系統性が存する事が当初から主張されたが、一方で著しい変化もあることを指摘している。砂沢式では、高杯・浅鉢・壺などで変形工字文との「斉一的な対応関係」が見られたのに対し、二枚橋式では高杯のみに限定され他器種では消滅する。更に変形工字文自体が、幅４㎜程度の太い沈線によって描かれ、貼付粘土粒が消滅し「沈線を施す際に篦によって押し出された粘土が低い隆起を成している」程度になる。主にこのような変形工字文の変異において前述した五所式

と類似する事から、両者は並行関係にあるとされた。更に須藤は、この種の変形工字文の施文工程を復元推定し砂沢式の施文順序をそのまま継承しているとし、「変形工字文Ｂ型」と名付けた（須藤　1976）。二枚橋式の存在をより明確な形で検出したのが、脇野沢村瀬野遺跡の調査である（伊東・須藤　1982）。この調査では発掘区が東西の２地区に設定され、厳密な層位的発掘の下で大量の二枚橋式土器と東地区から当該期の竪穴住居址が検出された。出土遺物の細かい類型化と組成率による検証を経て、本遺跡の出土遺物の総体は二枚橋遺跡の出土土器群と基本的に差異は認められないとし、両者が二枚橋式と設定されたのである。なおこの報告書でも、「変形工字文Ｂ型」という名称が使用され主に高杯を飾る文様として詳細に紹介されている。これら二つの遺跡の調査成果と各型式に相当する変形工字文の類型化を基に、須藤は東北地方弥生時代１期（砂沢式）・２期（五所式・二枚橋式）を設定した（須藤　1983）。この編年観が、本稿冒頭で述べた砂沢式からの二系統論に他ならない。

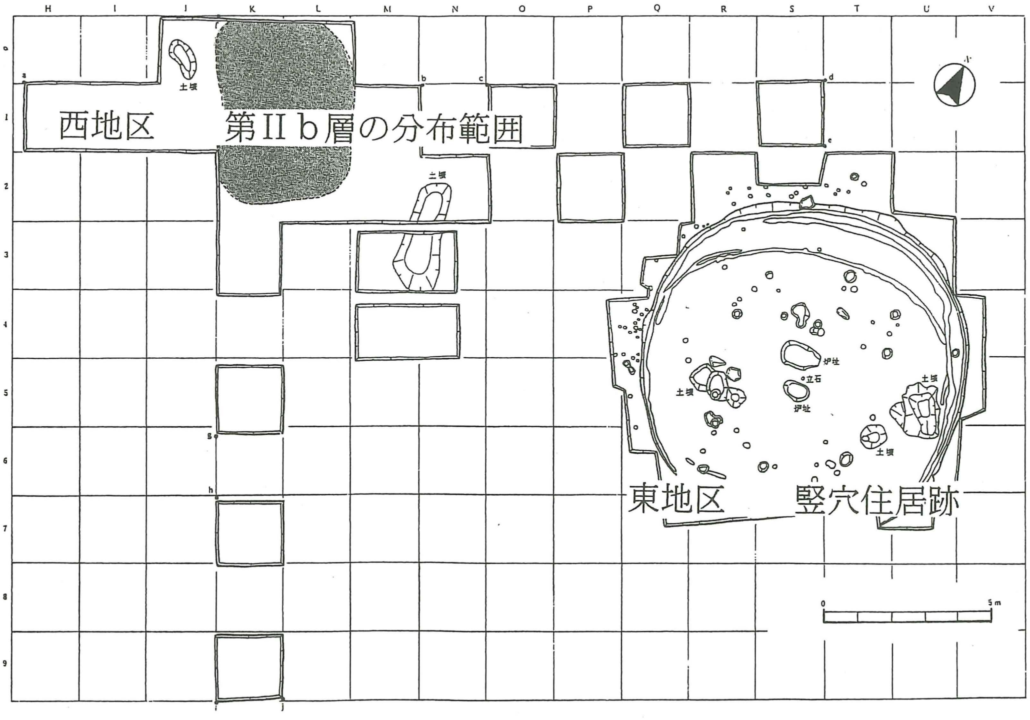
しかし砂沢式から二枚橋式への連絡は、細別器種の継承・消長を指摘するだけでは未だ不鮮明であると言えよう。すなわち「変形工字文Ｂ型」が、砂沢式の変形工字文のどの部分からどのような変化を遂げて生成するのかが具体的に述べられていないのである。こうした分析なしでは系統論を展開できないのは自明の理であるため、以下では砂沢式の新段階と二枚橋式の成立を主眼に据えて変形工字文の展開を考えてみたい。

まず、第２図11・12に模式図で示した文様構成が「変形工字文Ｂ型」である。須藤が指摘したように、「文様単位の上下の巾が著しく広くなっている」点にまず着目しなければならない（須藤　1970）。変形工字文の「文様単位」とは三角文と考えられるから、同図11・12中位に見られる扇形の三角文の事を指している。しかし特に11において、この三角文部分はＰ（主要素）ではなくＳ（副要素）に相当する点にこそ注意しなければいけないのである。同図11のＰは、独立して配置されるＸ（工）字形文部分に他ならない。交点付近には方形の彫り込みが施され、貼付粘土粒はなく沈線を薄く盛り上げるのみである。そうしてこのモチーフは、砂沢式Ｂ－２・３構成からの変遷を考えるのがもっとも自然である。同図９におけるＸ字形のモチーフの文様構成そのものを受け継いでいると言える。そう考えれば、同図11におけるＳに相当する三角文部は、同図９のＸ字とＸ字の間の菱形文から区画線を除去し、そうする事で縦に伸びた施文域に扇形の三角文を施したものと考えるのが妥当であろう。同図12は基本的な文様構成こそ同図11と共通するものの、Ｐ（主要素）による独立したモチーフが消滅し、むしろ扇形の三角文を施文の主軸に置くようである。ここでも縦に伸びた施文域は維持されている。二枚橋式には少なくとも新古の二段階がある事が分かる。

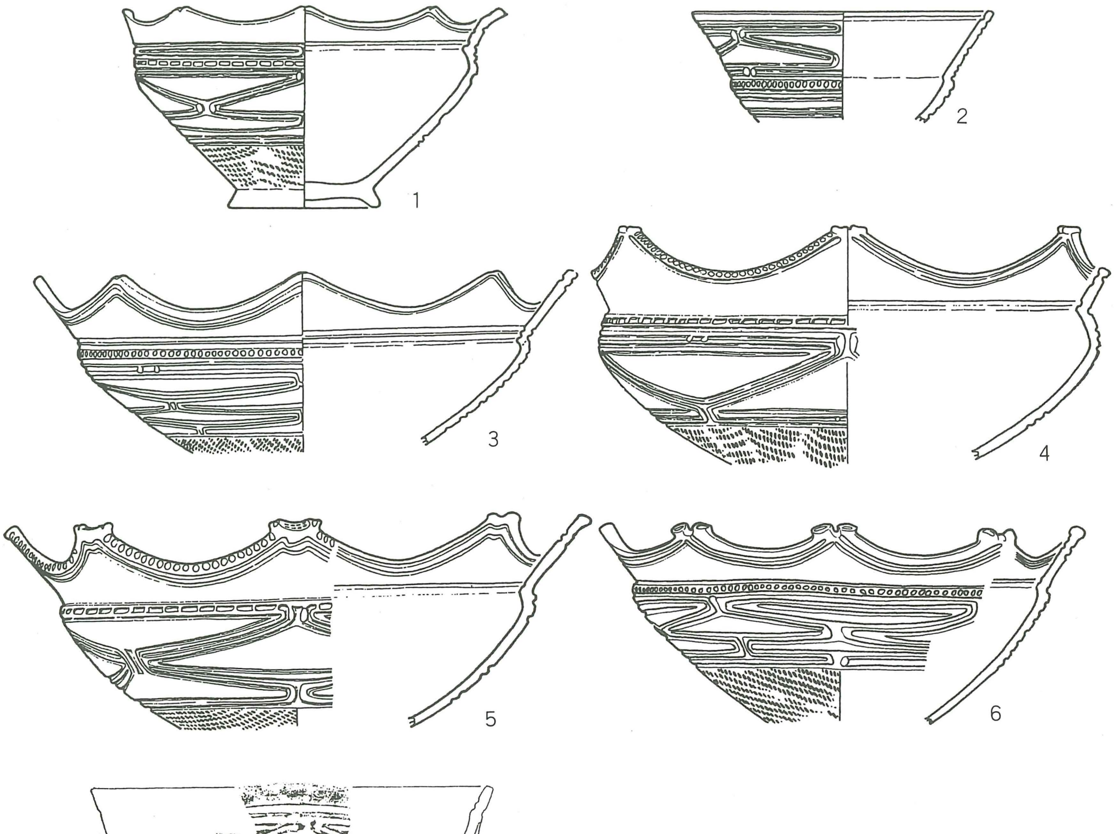
次に、具体的に遺跡・遺構ごとのまとまりにこうした段階区分が適用できるか検討する。二枚橋遺跡出土土器群（第７図１～５）はトレンチ調査で出土したものであるが、幾つかの小竪穴にまとまっていたなどから一括性の強いまとまりと判断された。これら高杯・鉢に施される変形工字文は大きく二つのグループに分かち得る。Ｂ－２構成の一段目（第２図７）の文様構成をそのまま引き継ぐもの（第７図２・４）、Ｂ－３構成経由のもの（第７図１・５）の２種である。ただし交点部の処理方法は多様であるし装飾・器形などは著しい規格性を見せているから、両者に時間差を認めるのは難しいであろう。図示しなかったが破片資料もその殆どが類似した文様構成をしめすから、

二枚橋遺跡は二枚橋式の中でも古相に比定することができると考える。なお杯部の施文域について、いずれも地文として縄文を採用している点に注意を払っておきたい。砂沢式新段階の高杯は杯部・台部それぞれの器高はほぼ同様であったのに比べ、二枚橋式は杯部の器高が縄文を施す分だけ伸びたとも言える。砂沢式新段階の高杯・浅鉢では体部全域に変形工字文を施していたから、東北地方北部だけでこの現象は説明がつかない。結節沈線文[10]の出自と共に検討すべき課題である。

瀬野遺跡出土土器群（伊東・須藤　1982）は、西地区の遺物包含層・東地区の竪穴住居跡出土の２群（第６図）に分けられる。もっとも報告ではこれら全てを一括して扱っているのであるが、本稿では二枚橋遺跡出土土器群との比較に伴い２群に分けて扱うことにする。東地区の竪穴住居跡出土土器群は第２図12に代表されるより新相の資料が目立つ。よって以下、本報告ではそのまとまりにあまり注意が払われなかった西地区出土の土器群（第７図６～10）を検討したい。西地区において遺物はⅡａ層：黒褐色砂質土層・Ⅱｂ層：黒色土層に主として包含されている。特にⅡｂ層が形成されている地区に遺物の集中が認められ顕著なまとまりがあるとされた[11]。同図６・９にはＢ－３構成経由の変形工字文が施されている。また９の台部にはＢ－２経由と思われる変形工字文が施されるが、Ｐが完全に独立して単位文化しており、間に刺突を充填している。勿論６の交点部処理は不明瞭な彫り込みのみであるのに対し、同図９では明瞭な彫り込みと沈線端部の盛り上げが顕著に観察されるなど相違点もある。浅鉢（同図７・８）は同じ器形を持つのに変形工字文の出自が違



第６図　瀬野遺跡平面図（伊藤・須藤1982を改変して作成）



第７図　二枚橋式土器

（１～５二枚橋遺跡、６～10瀬野遺跡）

う例を挙げる。7には3段に三角文を連絡させるA―3構成類似の変形工字文が施文されるのに対し、8にはB－2構成の2段ともS（副要素）を増やした変形工字文が施されるのである。一方で変形工字文を施す文様帯が異なる高杯（同図10）がある。杯部の屈曲部を一周する結節沈線文の上に狭い施文域ではあるが一段の変形工字文が施文されている。貼付粘土粒が小さい等を除けばこの構成は二枚橋式特有のものとは判断し難い。ただし二枚橋遺跡にも列点文より上に変形工字文を施す例（同図2）があるから、本稿では二枚橋式の古相に存在すると見ておきたい。新相と思われる竪穴住居跡出土土器群については主旨と外れる部分が多いため、本稿では除外する。

4．結　語

本稿では砂沢式の変形工字文を新古の二段階に区分した。古段階の定型化した文様構成のうち、A―1構成の変形工字文はその複段化手法によって特徴づけられ、既に触れたように主に日本海側に広がる。少なくとも福島県にまでその余波が広がることは鈴木正博によって既に指摘されている（鈴木　2000）。砂沢式新段階に入ると、主に津軽平野・下北半島にその分布域は凝縮される。本段階で生まれる変形工字文の構成差が既に文様系統の差である事は、次段階においてそれぞれ五所式・二枚橋式にスムーズに接続する点からも明らかである。五所式・二枚橋式についてもおおよそ新古相の段階のまとまりを把握した。特に二枚橋式については二枚橋遺跡・瀬野遺跡の包含層が古相にあたり、瀬野遺跡の竪穴住居跡出土土器群が新相にあたる[12]とした。結果的に須藤の編年観を裏付けすることになったが、この二系統は類遠賀川系土器の流入如何に拘わらず確固とした組織をもって当地に展開する事を示したつもりである。また従来須藤によって施文順序の復元から研究されてきた変形工字文について、構成要素に分解してP（主要素）のモチーフの変遷を第一に捉える見方を示した。これは伝統的な見方でもあるが、S（副要素）との対応関係や場合によってはSからPへ転換が起こり得ることも示した。こうした見方は変形工字文の施文技法が崩れを見せる段階・地域（恵山式の初期などは好例である）においてむしろ重要であろう。

本稿で示した編年観は、あくまで在地で辿ることのできる要素のうち最も基礎的な変形工字文によるものであるから、他要素について時期区分の整合性をとっていく必要がある。例えば福田正宏（福田　1997・2000）が示したように、北部亀ヶ岡式としての聖山式から連綿と続く波状入組文の系統を見れば、二枚橋式は砂沢式の系統のみからでは辿り得ない事になる。福田は「聖山式以来のネガ文様の抽出方法は砂沢式より二枚橋式に純粋な形で存続」（福田　1997）するので青森県の東西で入組文がそれぞれ別の変遷を遂げた[13]とする。砂沢式と二枚橋式に一部重複する範囲があるとする氏の時期区分案には、本稿で示した変形工字文の系統性の観点から批判を加えたいが、地域区分に関してはおおよそ合致するものと思われ、かつて須藤隆が唱えた二系統論は、時代（文化）区分論という新たな意味づけと視点をもって再検討する必要を感じている。

（2003年3月21日記）

本稿を草するにあたり、下記の諸氏および諸機関に多くの御教示・御協力を賜った。謹んで御礼申し上げます。なお本文中に誤りがある場合、全て筆者の責任に帰せられる事は言うまでもない。
（五十音順、敬称略）
石川日出志・利部　修・鹿又喜隆・小林　克・斎野裕彦・品川欣也・須藤　隆・高瀬克範・福田正宏・古屋孝祥・成田正彦・安岡忠一
青森県埋蔵文化財センター・秋田県埋蔵文化財センター・秋田市教育委員会・東北大学考古学研究室・弘前市教育委員会・明治大学考古学博物館

[図版典拠]

第１図　馬目・古川1970など参考に作成

第２図　引用参考文献に挙げた全ての報告書及び資料の実見により作成

第３図　１～10（藤田・矢島1991より転載）、11～14（白鳥ほか1997より転載）

第４図　１・４（宇部1980より転載）、２・５（工藤1986より転載）、３（伊東・須藤1982より転載）、６（工藤1987より転載）、７・８（葛西1991より転載）

第５図　１・３（藤田・矢島1991より転載）、２・５（三宅1975より転載）、４（田村1968を再実測・トレース）、６～９（村越1965より転載）

第６図　伊東・須藤1982より改変作成

第７図　１～５（須藤1970より転載）、６～10（伊東・須藤1982より転載）

[脚注]

1 高瀬2000ａにおいて用いられた用語。「遠賀川系」とは本来東海以西で用いられるべきという視点に賛成するため、以下この用語を用いる。

2 須藤は、晩期終末から弥生時代前期にかけて「西日本から稲作を基軸とする農耕技術を積極的に導入し、初期農耕社会へと発展する」（須藤1998、pp541）ものだと考えている。これは、例えば林謙作（林1976・1993）の見解とは本質的に異なるものである。いずれにせよここで言う二系統を抽出するにあたり、こうした歴史観が大きな役割を果たしている事は間違いないであろう。

3 砂沢遺跡では台地斜面部に完形土器の集中地点があり、ドットマップが報告書に載っている。こうした廃棄集中地点をブロックとして捉えて、それを編年学上の単位とするか否かは所謂亀ヶ岡式の研究史上においてたびたび議論されてきた問題である。図示しなかったが砂沢遺跡においては、筆者が設定した砂沢式古段階のまとまりは確かに存在するが新段階だけのまとまりはない。更に言えば五所式段階とされる土器群は、分布の傾向も掴むのは難しい。よって遺跡全体の性格を考えて型式学的に抽出し、周辺の遺跡と比較する方法が妥当と判断した。筆者自身はこうした空間における遺物分布の捉え方は型式学とは別個にあるべきと考えている。一方で品川氏は大洞Ａ’式から「砂沢３期」までの変遷を集中地点の移動で説明している。

[4] 下北半島～馬渕川流域では構成の別に拘わらず、P（主要素）の三角文の頂点部が交点に接触せず遊離するという施文技法上の特徴がある。交点部の彫り込みを最初に区画線に施した後、沈線を連続反転させて施文していると思われる。

[5] 東北大学考古学研究室のご好意により実見した。

[6] 秋田県横長根Ａ遺跡（児玉1984）でも類似した変形工字文を施す高杯・壺などが出土している。Ａ—３構成直後と判断される規格化されているもの・P（主要素）の接続が崩れて交点部分に明瞭な彫り込みがないものの二種があり、五所式との関連が示唆される。

[7] 井沢式・田舎館式土器群における変形工字文経由の文様を扱う際、こうした視点が重要となってくると思われる。

[8] 弘前市教育委員会成田正彦氏のご好意により実見し、筆者が再実測した。

[9] 元来は、二枚橋遺跡を発掘調査した伊東信雄、或いは中島全二らによって名付けられたようである(橘1969)。一方で二枚橋遺跡よりいち早く刊行された宿野部（榀ノ木平）遺跡の報告（江坂・村越1967）では、類似の土器群に宿野部式なる名称をつけている。橘は後者を優先すべきと主張しているが（橘前掲)、宿野部式の内容が二枚橋式と合致するかどうか今もって不明であるため本稿では二枚橋式としてこの時期の土器群を捉えておく。なお、橘は鋸歯文を重視して「二枚橋式土器文化に若干の年代幅がみられる」とした(橘1975)が、本稿における二枚橋式の段階区分とは本質的に異なるものである。

[10] 沈線の中を局部的に更に彫り込み、２～５㎜程度の小粘土粒を一方へかき寄せ、沈線に節を設けるものを指す。高杯・台付鉢においてそれぞれ変形工字文・波状入組文の直上に施される事が多い。同様の位置に結節ではなく丸い列点文を施す場合もあるが、両者に先後関係があるのかどうかは不明である。

[11] 報告書によれば東地区の竪穴住居跡の覆土（Ⅲａ・ｂ・ｃ・ｄ層）との先後関係は、Ⅱｃ層の介在によっても分からない。

[12] 最近高瀬（高瀬1998）が恵山式の成立を考えるに際して、二枚橋式に新古段階の別がある事を示唆したが、基本的に本稿と一致するものである。恵山Ⅰ式・宇鉄Ⅱ式と類似する部分が多い瀬野遺跡出土土器群を新段階としている。変形工字文については「簡略化」すると述べるに留まる。

[13] 福田は橘善光（橘1967）に従い、下北半島における砂沢式並行の土器型式として「江椓沢式」を認めている。ただしこれは入組文の系統のみを重視したものである（福田氏本人のご教示による)。本稿では青森県東半の砂沢式として西半と一括しているが、本稿で確認した変形工字文等以外に、下北半島独自の型式内容が明確になり次第相当の名称を与えてもよいと筆者は考えている。

[引用参考文献一覧]（五十音順）

新谷雄蔵　1974　「津軽地方における砂沢系土器群の分類的研究」『北奥古代文化』７

飯島義雄　1993　「変形工字文の構造」『財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要』11

石郷岡誠一・西谷　隆　1986　『秋田市秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書』

石川日出志　1985　「関東地方初期弥生式土器の一系譜」『論集日本原史』吉川弘文館

磯崎正彦　1964　「晩期の土器」山内清男編『日本原始美術』１、170—173頁、講談社

磯崎正彦・上原甲子郎　1969　「亀ヶ岡式文化の外殻圏における終末期の土器型式—新潟県・緒立遺跡出土の土器をめぐってー」『石器時代』 9

伊東信雄・須藤　隆　1982　『瀬野遺跡—青森県下北郡脇野沢村瀬野遺跡の研究—』東北考古学会

伊東信雄　1985　「東北地方における稲作農耕の成立」『日本史の黎明　八幡一郎先生頌寿記念考古学論集』六興出版

岩見和泰　2002　「前期弥生土器成立期の様相—山形県生石２遺跡出土土器を中心にー」『古代文化』54－10

宇部則保　1980　『是川中居・堀田遺跡発掘調査報告書』八戸市埋蔵文化財調査報告書５

江坂輝弥・村越潔　1967　「下北郡川内町宿野部桷ノ木平遺跡」『下北－自然・文化・社会－』九学会連合下北調査委員会

大竹憲治　1985　「御代田式土器の再検討」『物質文化』44

岡田康博編　1988　『東北地方の弥生式土器の編年について』縄文文化検討会

小田野哲憲　1987　「岩手の弥生式土器編年試論」『岩手県立博物館研究報告』 5

利部　修　1990　『諏訪台Ｃ遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財報告書第196集

葛西　励　1991　『戸沢川代遺跡発掘調査報告書』青森県川内町教育委員会

木村早苗　1998　「青森県出土の『遠賀川系土器』」『突帯文と遠賀川』土器持寄会

工藤竹久　1987　「東北北部における亀ヶ岡式土器の終末」『考古学雑誌』72－４

工藤竹久・高島芳弘　1986　「是川中居遺跡出土の縄文時代晩期終末期から弥生時代の土器」『八戸博物館紀要』2

工藤竹久・滝沢幸長　1984　「剣吉荒町遺跡発掘調査報告書」名川町教育委員会

児玉　準　1984　『横長根Ａ遺跡』若美町教育委員会

小林圭一　2001　「最上川流域における縄文時代後・晩期の遺跡分布」『山形考古』 7 － 1

小林達雄　1994　『縄文土器の研究』小学館

斉藤瑞穂　2001　「東北地方における遠賀川系土器の展開に関する一試論」『筑波大学　先史学・考古学研究』12

笹森一朗・茅野嘉雄　1997　『津山遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第221集

佐藤信行　1980　「東北南部における縄文晩期終末とその直後の土器文化 — 弥生式土器への移行過程の認識 —（上）」『考古風土記』 5

1981　「東北南部における縄文晩期終末とその直後の土器文化 — 弥生式土器への移行過程の認識 —（下）」『考古風土記』 6

佐藤嘉広　1985　「最上川流域における弥生文化の成立」『北奥古代文化』第16号

1989　「東北地方北部における弥生文化受容器の様相 — 北上川中流域の土器群の分析を中心に—」『岩手県立博物館研究報告』第７号

1992　「東北地方における遠賀川系土器の受容と製作」『加藤稔先生還暦記念　東北文化論のための先史学歴史学記念論集』

設楽博己　1991　「最古の壺棺再葬墓 — 根古屋遺跡の再検討」『国立歴史民俗博物館研究報告』36

2000　「縄文系弥生文化の構想」『考古学研究』47－１

品川欣也　2002　「砂沢式土器の型式学 — 北日本先史時代史の再構築に向けて—」2002年度駿台史学会研究発表要旨

白鳥文雄ほか　1997　『宇田野（2）・宇田野（3）・草薙（3）遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第217集
鈴木正博　1987　「続大洞Ａ２式考」『古代』84
　　　　　2000　「『砂沢式縁辺文化』生成論序説」『婆良岐考古』22
須藤　隆　1970　「青森県大畑町二枚橋遺跡出土の土器・石器について」『考古学雑誌』56－2
　　　　　1976　「亀ヶ岡式土器の終末と東北地方における初期弥生土器の成立」『考古学研究』23－2
　　　　　1983　「弥生文化の伝播と恵山文化の成立」『考古学論叢』Ⅰ芹沢長介先生還暦記念論文集刊行会
　　　　　1984　「東北地方における弥生時代農耕社会の成立と展開」『宮城の研究』Ⅰ
　　　　　1992　「弥生社会の成立と過程」新版『古代の日本』第９巻「東北・北海道」pp75-104
　　　　　1997　「東北地方における弥生文化成立過程の研究」『歴史』89
　　　　　1998　『東北日本先史時代　文化変化・社会変動の研究』纂修堂
芹沢長介　1960　『石器時代の日本』築地書館
高橋龍三郎　1993　「大洞Ｃ２式土器細分のための諸課題」『先史考古学研究』４
高瀬克範　1998　「恵山式土器群の成立・拡散とその背景」『北海道考古学』34
　　　　　2000ａ　「東北地方初期弥生土器における遠賀川系要素の系譜」『考古学研究』46－４
　　　　　2000ｂ　「東北地方における弥生土器の形成過程」『国立歴史民俗博物館研究報告』第83集
高瀬克範・福田正宏　2001　「入舟遺跡出土の土器について―道央の終末期縄文土器と初期続縄文土器の編年―」『余市町水産博物館研究報告』４
橘　善光　1967　「青森県むつ市江豚沢遺跡調査概報」『うそり』４
　　　　　1968　「下北半島の彌生式土器の研究（1）」『うそり』５
　　　　　1969　「下北半島の彌生式土器の研究（2）」『うそり』６
　　　　　1975　「東北北部の弥生式土器文化（上）『考古学ジャーナル』106
田村誠一　1968　「大曲Ⅲ号遺跡」『岩木山』
永嶋　豊　2000　「東北地方北部の青木畑式土器」『青森県埋蔵文化財調査センター研究紀要』５
中村五郎　1976　「東北地方南部の弥生式土器編年」『東北考古学の諸問題』東北考古学会編
　　　　　1982　『畿内第Ⅰ様式に並行する東日本の土器』
　　　　　1986　「縄紋土器と弥生土器　東日本」『弥生文化の研究』３
　　　　　1988　『弥生文化の曙光』未来社
日本考古学協会編　1994　『北日本の考古学　南と北の地域性』吉川弘文館
畠山憲司・小林　克　1981　「秋田県における亀ヶ岡文化の展開」『考古風土記』６
林　謙作　1976　「亀ヶ岡文化論」『東北考古学の諸問題』東北考古学会
　　　　　1993　「クニのない世界」『みちのく弥生文化』弥生文化博物館平成五年春期特別展
弘前大学教育学部考古学研究室　1981　「牧野Ⅱ遺跡出土遺物について（1）―岩木山麓の縄文時代終末期の土器資料―」『弘前大学考古学研究』１
福田正宏　1997　「亀ヶ岡式土器における入組文のゆくえ」『物質文化』63
　　　　　2000　「北部亀ヶ岡式土器としての聖山式土器」『古代』108
藤田弘道・矢島敬之ほか　1988　『砂沢遺跡発掘調査報告書―図版編』弘前市教育委員会

1991 『砂沢遺跡発掘調査報告書—本文編』弘前市教育委員会
松本建速　1998 「大洞A’式土器を作った人々と砂沢式土器を作った人々」『野村崇先生還暦記念論集 — 北方の考古学 — 』
馬目順一・古川　猛　1970 「福島県郡山市　一人子遺跡の研究—所謂亀ヶ岡式土器終末期の吟味 — 」南奥考古学研究叢書Ⅰ
三宅徹也　1975 「西津軽郡深浦町吾妻野Ⅱ遺跡の出土土器について」『青森県立郷土館調査研究年報』1
村越　潔　1965 「東北北部の縄文式に後続する土器」『弘前大学教育学部紀要』14
矢島敬之　1992 『弘前の文化財　砂沢遺跡』弘前の文化財シリーズ第15集
2000 「津軽・砂沢式直後土器雑考」『村越潔先生古稀記念論文集』
山内清男　1925 「石器時代にも稲あり」『人類学雑誌』40－5
1930 「所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄文式土器の終末」『考古学』1－3
1939 『日本遠古之文化』
山内清男編　1964 『日本原始美術』1、講談社